メンタルヘルス秒読みドクター

pilot

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

りせいつきた
せいしんこわれた
そううつになった
けし　うまい

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 11
第4話 …… 15
第5話 …… 21
第6話 …… 29
オペレーターを向精神薬代わりに使うヤベー奴
第7話 …… 37
第8話 …… 42
第9話 …… 51
都合のいい
第10話 …… 56
第11話 …… 64
第12話 …… 70
第13話 …… 75
第14話 …… 82
第15話 …… 92

第1話

なにもない。

体力も、金も、気力も、家族も、体力も、まともな健康も、経験も、記憶も、何もない。

何もないがある。

もうなにかわからん

何度理性回復剤を流し込んだ？

頭がいたいのはもういつものことだ。

寝ても覚めても頭痛、頭痛、頭痛。

いけどもいけども頭痛。

いっそ寿命も縮めてくれれば苦しみが短くなるかもしれないのに。

どうしたって以前の私はここまで働き者だったのだろう。

私がいくら頑張ったって、以前の私は今の私より上を行っていたらしい。

記憶喪失？

違うな、生まれ変わったんだ、前の私と今の私じゃあまるで別人だ。

だのに皆私を通して「私」を見るんだ。
どれだけ身を粉にして働いたって実感がないのに、それでも働かなければという意識だけが先行する。
「疲れた？」
ああ疲れたさ。とっても、つかれた。
「いいや、大丈夫だよ、大丈夫……」
真逆の言葉を紡ぐという行為だけはもう達人級だ。
銀髪の、狼。あの種はループスというんだったか。
彼女がレッドだったよな。
赤い服装をしてるから覚えやすくて助かる。
秘書にしたのは私だというのに仕事に向き合う時間がながすぎてそれすら忘れかけていた。
スケジュール管理は、終日仕事と書き込むだけでいいからな。
そういえば赤いやつには気を付けろとか言ってるやつがいたな。
皆こいつのことを指していたのか？
少しだけできた、次の地獄の待ち時間で私はやっとこの秘書に意識を向けたのだ。
突然私は気になった。

コイツが私を今殺さない確証はない。ということに、気づいた。とそのときは思っていた。

落ち着いて考えればそんなもの、突然彼女が私ごときを殺したところでどうなるのかと言われてしまえばそこまでなのだが、溜まりに溜まった疲労と薬物によりそのときの私は大きな陰謀に気づいてしまったかのような気分になっていた。

でも私はどうすることもできず、ただ睨むことしかできない。

ああ無力だ。

仮にコイツが私を殺そうとして、私は抵抗することすらできないのだ。

ああなんて嘆かわしいのだろう。

ひたすらに情けない。

作戦立案などもうシルバーアッシュにでも任せておけばいいじゃないか。

正式に雇え。協力してやれ。彼はきっと私より大きなリターンを出してくれる。

基地運用はもうアーミヤも十分できるだろう。

戦闘は言わずもがな。

ああ！もう私いらないじゃないか!!!バカらしい！アホらしい!!!

殺してくれ！いっそ！

「うグググうううウウウうう……」

気づけば私は唸っていた。
我ながら末期だ。
表に出してはいけない感情なのはわかっていた。
こんなのが、ロドスの最高責任者の内の一人だなんて恥でしかない。
レッドは私をどう見るのだろうか。
ちらりと向こうを見やる。
目が、あった。
純真な目だ。殺しあいの中に身を置いているのに、そんなにもきれいな目をしている。
私の目は寝不足と薬のやりすぎで真っ赤になっていた。
そんな目を見て、なんて言葉を出すのだろう。
「狼の……　真似……　？
上手だと、レッド、思う。」
静かに、控えめに、でも少し嬉しそうに。
口を開けば、そんな話だ。
ああ、自分の無力さよ。
どうしてこんなにも彼女たちは眩しいんだろう。

真似、真似かぁ。
私に真似る資格があるかな。
近付かれて迷惑じゃないかな。
もうとうに、誇大妄想と被害妄想は消えていた。
浅かった。その程度かと聞かれれば、確かに真剣だったはずなのに。
もう少しだけ、もう少しだけ、彼女、彼たちのために頑張ろう。私。

第2話

「お〝な〝か〝す〝い〝た〝ね〝ぇ〝レ〝ッ〝ド〝くん〝」
「えっ。」
我ながら、地獄の底から響き渡るような低音だ。うるさい。
でも叫ばずにはいられない。
何故なら。
「お〝な〝か〝す〝い〝た〝ね〝ぇ〝レ〝ッ〝ド〝く〝ん〝」
「れ、レッドもそう思う……よ……？」
私は、今！死ぬほど！腹が減っている！
キョトンとした顔をしても無駄だ！私の腹ごしらえに付き合ってもらおう！
「というわけで私が作るから待っておいてくれ。」
「うん……」
用意するもの！鍋！野菜！肉！なんかいい感じの塩入り調味料！麺！
そして一番大事、社員食堂の使用許可！以上！
「フハハハハ！カップ麺とはレベルが違うのだよ！製薬会社ロドスのドクター足るもの

健康には気を付けんとな！」
笑いが止まらん。躁状態だ。一生これがこのまま続けば良いのに。
フードの中ではにやにやしながら、肉を鍋に突っ込む。
鳥の肉だ。
出汁が出てとてもよい。
サイレンスは旨いのかな。
いや私は何を考えてるんだ恐ろしい。
「それ、ドクターが言っても、説得力無い。」
やめろ！私は完全栄養食サプリメント様のお陰で栄養面は問題ないはずなのだ！大丈夫なのだ！
ただ満腹中枢はそんなものを飯とは認識してくれない。
黙れ私の本能！
すこしばかりヤバイ薬キメて一生脳に直接負荷かけてるだけだから！
ダメじゃないか。
自分で考えて辛くなってきた。
「私をなめてもらっては困るぞレッドくん。
一度は研究者でもあった身、今はもう一度勉強中だが少しは自信がある。料理は化

学、健康は料理。
つまり化学＝健康！化学ができる私は健康！ＱＥＤ!!!」
取り敢えず勢いで押し通す。
鬱と躁を行き来する私は、自分でもよくわからない。
「ええ……」
疑いの目を向けられる私。
ヤバイ鬱になる。やめてくれその目。
やめてくださいお願いします。
「おほん……　疑うようだが、適当に調味料ぶちこんで材料も投入し適当に煮れば完成する効率的な料理だよ。シンプル故に失敗はありえない！万に一つもだ！私の腕は自動指揮を習得しているのだ！」
肉が煮えてきたので次いで野菜をぶちこむ。
レッドも、初めは疑ってかかっているが、時期にもぐもぐ食べてくれると私は信じている。
オラァ！醤油ベースの出汁を食らえっ！
うーんいい色合い。絶対旨い。
この瞬間がたまらんのだ。

立ち上る湯気が香ばしい。芸術品だろこれ。
文明の利器様々だ。（？）
「すごく、匂う……　多分、いい匂い？」
そうだいい匂いだ、私の好きな香りトップ３に入る。
醤油はいい。
「いい感じだろ？」
旨いのだこれが。
はい！麺をドーン！
白く太めでかみごたえのあるこの麺が、このだしと絡まって舌と体に直接旨さの暴力を伝えてくれるのだ。
あとは少し煮るだけ。
火を通すだけだ、あまりふやけさせると不味くなるからな。
「出来たぞ！料理かと聞かれると疑問符が着くが、味と栄養と食べやすさは保証する。」
丼に盛り付けた、私の作った料理を彼女の前に置く。
ふんふんと匂いを改めて嗅ぐレッド。
箸を渡し、私も席につく。
「頂きます！」

「？……　頂きます。」
真似して食前の挨拶をする姿は中々珍しい。
常識が欠けているところに親近感を感じるのもまたおかしな話かもしれないな。
「上手くできたかな？」
「熱い。でも、多分、美味しい。」
「それはよかった。」
本当に、良かった。
腹が減ると鬱になる。
空元気でもしなければもう直ぐにでも死にたくなる。
人間のからだとは、こうも脆く度し難い。
ただ、ほんとにぶちこんだだけの、料理力の欠片もない、言わば味と消化性を整えただけの料理なのだが、私たちのような家族がいなかった、あるいはまともじゃあない、めんどくさがりかもしれない人間には、こんなものが一番旨いし、最も食べやすく安心できるのだ。
だからこそ私は、少しでも健康には気を使わなければならないんだ。
心も、体も。
もう壊れかけてるけども。

第3話

肉を割く。
内臓を抉る。
とりだし、発生している鉱物へ直接触れる。
絶叫。悲鳴、おぞましい。
叫ぶな。
手が震えるだろうが。
まだまだ私には見地が必要なのだ。
そのためには、死にかけていたお前を治療して、そのまま実験台にしても問題ないだろう。
「――――!!――――!!」
口を塞いでいてもうるさい。
やめろ。そんな目で私を見るな。
私が怖いか？私も怖い。人が怖い。
だからどうした？怖くてもやらなくてはならないことも多いんだぞ。

生きた鉱石組織に、さまざまな実験を施していく。
面白い。とても面白い。面白いが、頭がいたい。
一番オリパシーの影響が出るとされる脳は後回しだ。
今すぐにでも切開して、中を覗いて、実験して、ぐちゃぐちゃにしたい欲に負けそうになるが、あまり都合のよい体は早々手に入らない。
死体の山からやっと見つけ出した、生きた組織なのだ。
まったくオペレーターたちは、頼もしいが殺意が高い。
「私は人くらいいくらでも、殺して、騙して、そして進まなければならないんだ……」
だから、許せとは言わない。
レユニオンの一般兵、ありがとう。
反応を片っ端から画像データに残し、多種多様な試薬で化学変化を記録し、そして物理的性質も平行して調べる。
アーミヤだって頑張ってるんだ、私も進まなければならない。
徹底的な効率化で、無駄なく、美しい手順で、こいつの体は余すところなく感染者の未来のために利用される。
前の私も、こうやって実験していたのだろうか。
不思議と、罪悪感よりも高揚感の方が大きかった。

しかし、自分という存在への不安と、嫌悪感は増大する一方であった。
こいつ、鳥の形質持ってるのか。
嫌なことだ。

「いやし……」
精神的に疲れたときはこの手に限る。
実験で精神的に疲れた私はいつもいつもこうしている。
レッドの頭を撫でるのだ。

「ええ……　ドクター、血生臭い……」
風呂には入ったんだけどな。
まあそうそう取れもしないか。
「すこしだけ、作業をしていたんだ。殺さずに捕獲してこいっていったって、殺しに来る相手を殺さず捕らえることは難しい。
やっと手に入った、珍しい検体だったから、新鮮な内に作業したかったんだ。」
なんともまあ、醜い人間だな、私は。
片手間に感染者を殺し、その中の生き残りを漁り、苦しませて殺す。
その一方で、こうやって普通に、レユニオンのような影とは離れた普通の生活も送っている。
躁鬱だ。
実験中の高揚も、後から見れば自己嫌悪に陥る物でしかない。
肉を裂くその手でまた別の肉を裂き、レッドと一緒にご飯も食べている。
この前の鶏肉と、きょう引き裂いた鳥っぽいやつの肉が思い出で重なり、すこしばかり吐き気を覚える。
いつか、割りきれればいいな。

第4話

私は、ロドスを疑いはしない。
黒い部分が見えかくれしても、以前の私がここにいたのだ。
そしてなにより、アーミヤがここのリーダーなのだ。
ロドスを疑うということは、私を救った彼女を疑うことと同義である。
だが、疑いはしないものの、時にもどかしい思いをすることがある。

何気ない会話。
オペレーターの装備品をグレードアップ、つまりは昇進するための鉱石素材を発掘する指揮を一通り執り終わり、何時ものように机に向かっていた時だった。
私も大して饒舌ではなく、レッドもそれは一緒で、遅々とした会話であったがそのなだらかなコミュニケーションが私は好きだった。
いつ頃だったか。
そのうち、家族という概念が話題に上った。
プロファイルでは彼女の家族関係は不明瞭、レッド本人もそれとなく流れで言ってい

た。
「家族？レッドに家族はない。」
ただ一言、いないという事実を。
「ドクターは、家族が欲しいのか？」
欲しいのか？
私は私にそれを問いただしたが、答えなど出るはずもない。
何故ならば、私は家族を知らない。
レッドと同じで、私も何もかも失くしてるからだ。
「わからない。君は？」
だから私も聞き返した。
「いたら、楽しそう。」
そうだな。
そうだよな。
居たはずなんだけどな。
もどかしい点の内の一つとは、私の家族の顔すら開示してくれないということだ。
他オペレーターのプロファイルはあれど、私自身を示すものは何処にもない。
それがどうにも、恐ろしくて仕方がないのだ。

だが今日は、いくらかマシな日になる筈だ。
今日は休日!!!
ヒャッホー!!!!
でも理性分は働いた!!!
機密情報輸送したあとに出掛けるのなんか背徳的だなぁ!!!
ロドス最高です!!!
「ドクター、楽しそう。」
楽しいに決まってるだろ!!!
普段私たちが守る平和の中で過ごせるんだ、ここまで達成感と充実感を得られることはない!!!
行き先は龍門！
レッドもはにかんだような笑顔を浮かべてる！嬉しい！
折角出掛けるんだ、皆にもお土産を買っていこう！
普段いつも私のようなものの指揮に命を預けてくれてるんだ、お礼をしなければいけない。
龍門！

やはり活気に溢れている。
美しく、素晴らしい。
ウェイ長官は賢い人間だったな。
だからこそここまでの都市を築き上げられたのだろう。
「家族……　あれ……　？」
レッドと何故こちらへ来たかと言えば、それは我々に足りないもののサンプリングのためだ。
私は家族がわからない。
レッドも家族がわからない。
だが活気ある都市には、そのサンプルがゴロゴロ転がっている。
巨体な土地を占める自然豊かな、しかし管理の行き届いた公園。そこに我々は訪れた。
そこで遊ぶ子連れの家族。
子供は元気でいいぞ。
カップルもいる。
あれも言わば家族だろう
老夫婦が寛いでいる。

あ、孫も居た。良く懐いてる。
犬の散歩をしてる奴もいるな。
レッドも目を輝かせて、普段血にまみれてでも守ろうとした風景を目に焼き付けている。
そういえば彼女は認知能力がとても高いんだったな。
それぞれの幸せな姿を穴が開くほど見つめている。
「家族……レッドも欲しい……」
突然ぽつりと呟くレッド。
その顔は、直前までの嬉しそうな顔から少し悲しそうな、羨望の混じった顔に変わりつつあった。
レッドはときたま後悔しているような素振りを見せる。
自分が普通から外れた存在であることを、少し引け目に感じるのか。
私はその気持ちが良くわかる。
「ロドスの皆は、君と家族にでも、なんでもなってくれるよ。皆優しいからね。」
安っぽい励ましだが、本心だ。
良くわかるからこそ、浮かぶ言葉は少ない。
「ケルシーも……ドクターも?」

ああ、もちろん。
「もちろん、そうだよ。ケルシー先生は厳しいが、本当はとても他人の事を考える人だ。もちろん、こんなぼやけた人間でいいのなら、私も君の味方になるよ。」
「ロドス、皆優しくて、レッド幸せ。」
「私もそう思うよ。皆、優しい。すこしすぎるくらいに。」

第5話

爆発音。
叫び、泣き声。
打撲音。
あれ？私はさっきまで……
わからない。
ショックで頭が働かない。
そこまで逡巡した瞬間、私は突き飛ばされた。
ほんのコンマ数秒前に私が存在していた空間に、太く速い矢が存在を主張し、通りすぎていった。
死にかけたのか？私が？何故今？
なんで？
なんで？
なんで？
なんで？

なんで？
理性を使いきった頭は、肝心なときに回らない。
「ドクター……！無事……？」
レッドだ。
先ほど突き飛ばして命を救ってくれたのは彼女だろう。
徐々にショックから脳が復帰してくる。
そうだ、さっきまで私たちは散歩していたんだ……
だが、今の光景は散歩とはかけ離れてしまっていて、どこもかしこも暴徒が暴れていた。
レユニオン……
レユニオンか……
死体の山だ。
さっきまでは幸せの象徴だった、カップルたちの死体だ。
家族たちの死体だ。
老人と孫の死体だ。
私にはもう、区別はつかないが。
龍門のスラムにいた感染者の内の過激派か？

それとも外部からの侵入者か？
いや、もうどうだっていい。
一つ確かなのは、私はまた失敗したということだ。
これ以上私は失敗するわけにはいかない。
「逃げよう……　撤退だ。」
そうだ。逃げよう。逃げるんだ。
レッド。
「今はまだ、逃げたくない。」
何を？
何を言ってるんだ？
「なんで？」
なんで？
「奴等、殺す。」
なんで？どうして？
「どうして!?」
無茶だ。
「初めてだ。初めて、ケルシー、オバアサン、ロドス、ドクター、全部関係なく、殺した

いと思った。だから、殺す。許せない。」
強い語調。いつも穏やかで無邪気な彼女らしくない
ハッと気づく。
今まで他オペレーターでは良く見た、しかしながらレッドは今までに見せることのなかった、初めて見る表情を浮かべていることに。
憎しみだ。
義憤だ。
怒りと悲しみを混ぜた酷い目をしている。
醜い顔だ。
醜い精神だ。
でも、人はそれを止められない。
レッドには、もう少しマシな理由で自立して欲しかった。
願わくば、ポジティブな理由で自分の意思を発露させて欲しかった。
だが実際には、殺意と怒りと喪失感に突き動かされた、おぞましき感情を原動力にし凶行に及ぼうとしている。
私にそれを、止めることはできない。
出来るとするなら、彼女の決断を最後まで見届け、責務を一緒に背負ってやることだ

ろう。
「ケルシー、私と、二人でレユニオンを壊滅出来るって、だからドクターとも、ドクターとレッドでも、二人で……」
そんな恐ろしいことを言わないでくれ。
それはケルシーが強いだけだろう？
わからないかな。
私が理解しようとしていないだけであろうか。
ああでも、もうここまで来てしまったのだ。
私がどうであろうと関係ない。
「わかった。適宜私が指示を出す。」
私はもう、選択を肯定するしかない。
レッドが決意の表情を浮かべた気がした。

死体。

死体。
死体。
死体。
どこもかしこも、死体だらけ。
全身重装備の近衛局と、急行してきたロドスの感染者死体処理班が、まぜっこぜにされた数多の死体を運んでいく。
私たち二人は、二人で作り上げた死体の上を歩きながら、辺りを見渡す。
彼ら近衛局と処理班はその死体の直前の生命を知らないし、私は直前に何をしていたかは知っていても、誰がどの死体なのかは知らない。
穴の開くほど見つめていた、幸せそうな家族たちは今は本当に穴だらけになってしまって、もう生きていた頃と判別がつかない。
だが、レッドは違う。
暴徒とその被害者は、私たちの瞳からすればどちらもただの肉塊だが、レッドにはそう見えない。
彼女の認知能力は優れすぎているのだ。
「犬の家族。若い家族。老いた家族……」
だからああなっても判別がつく。

ついてしまう。
「子連れ家族……」
暗い声だ。
「犬、蹴り飛ばした奴。若い女、引き裂いた奴。」
怒った声だ。
「老いた人間、殴り殺した奴。子供を生きたまま、内臓を抜き取った奴。」
先ほどまでただ歩いていただけなのに、今は念入りに肉塊を踏みにじり、何度も踏み抜き、その黒い靴を赤黒く染めている。
「レッド、殺したのに、まだ、まだ殺したりない。
獲物が足りない。どうして？なんで？
教えて、ドクター。」
なんで？
どうして？
そんなものは私にもわからない。
私たちが休みもとらず働いていれば良かったのか？
わからない。
わからないのだ。

きっとこれは誰にだってわかるものではない。
「答えは……　君が……」
だから私は逃げた。
逃げるしかなかったのだ。
こうも我々の努力は目の前で簡単に潰えると言うことを、認めたくなかったが故に。
レッドはこの一件で前よりも自立したようだが、それが良いのか、悪いのかはまだわからない。

第6話

消え入りそうな声で、私は泣いていた。
泣いていた？
泣いたはずなのだ。
夢かもしれない。
何もない部屋の、天井を見ている。
涙が出た筈なのだ。
確かに目尻には涙が溜まっている。
夢だったのか。
いいや違う、あまりの不甲斐なさに泣いていたのだ。
鬱というのは、何かの拍子に止まらない連想を産み、自分でも良くわからないうちに涙があふれでる。
何が悲しいのかもわからず、しかしただひたすらに悲しくて、自分が情けなくて、その目から涙を流すのだ。
あぁ、鬱だ。

前と今は変わらない、でも変わってしまったのだ。
私が、致命的な後押しをしてしまった。
レッドはあれから、特に変わらないように見えた。
むしろ、「オバアサン」だとかいう未知なる存在とも距離を置いて、望ましい方向に進んでいるかのように見えた。
我々からも、距離を置くようになった。
命令に忠実だった筈が、より殺意を剥き出しにし、敵に果敢に突撃するようになった。
もう彼女の枷は外されたのだ。
その研ぎ澄まされた牙と爪を、怒りのままに振るうようになっていた。
その要因の大部分は、レユニオンにある。
だが、最後の一押しをしてのは、他ならぬ私だ。
その目はかつての純真さが薄れ、いささか濁ったようにも見える。
子供っぽさはそのままに、邪悪になってしまったようにも思える。
無邪気な子供など存在しない。
ただ知らないだけなのだ。
知ってしまえば、大人すら凌駕する残酷さを垣間みせる。
彼女は、それだ。

今の今まで実感なく戦い、命の価値を理解してなかったがための、その純真さだった。
私が、見せたのが良くなかった。
彼女に暖かみを一度与え、そしてすぐ奪い去ったのだ。
もとよりないものに、人は執着しない。
今よりも失えば、やっと人は気づく。
レッドにはなにもなかった。
なにもなかったからこそ、恐れるものはなかった。
ところが私は、それを与えてしまった。
与えた上で、一番残酷な方法で奪い去った。
彼女の家族への憧れ、ロドスの皆の努力の結晶、平和な龍門をその目に焼き付かせ、その上でそれを思いっきり踏みにじった。
上向きの心は、そのまま符号を変え、負の向きへと進んでいったのだ。
ゼロにはいくら負の数をかけようがゼロだが、プラスへ負をかければ、マイナスとなる。
それがいくらささやかで、つつましやかで、欠片のようでしかなかったとしても、もう既に一歩を踏み出したのだから直ぐに転げ落ちていく。
ケルシーには、悪いことをした。

事実どれだけ私は怒鳴られたか。
仕方のないことだ、私が悪いのだ。
ああそうだとも、余計なことをした。
アーミヤすら満足に慰めてやれぬこの私が、他の人間をどうこうするのが間違いだったのだ。
ああ、願わくば自分の意思で、幸せになって欲しかった。
不幸になど、自分の判断でもなってほしくはなかった。
あれから数週間後、今日も私は悔やみ続ける。

毎日毎日付き合わせる顔。
だが今日は、すこし違った。
今日の顔は、酷くなかった。
私の前では、柔和な前と変わらぬ顔を見せてくれているのか？
無理はしてないのか？
あんなに残酷な物を見たのにか？
ほんのすこし前まで、あんなにも憎悪に駈られていたのにか？
わからない。

なんで？

「ドクター、今日も疲れてる？」

疲れているか？

きっと疲れているのだろう。

だからどうした？

疲れたら休ませてくれるのか？

それは誰が保証するんだ？

私か？アーミヤか？ケルシーか？

いくら我々が知性と技術と武力に秀でたとして、世界の絶対的な明日を保証することなど到底不可能で、畏れ多いことだ。

明日宇宙からなにかがやってくるかもしれない。

海の底からなにかがやってくるかもしれない。

我々の心からなにかがやってくるかもしれない。

結論として、私は疲れている。

世界が疲れている。

明日へ、この世界は生まれた頃から歩んできた。

希望と絶望と欲望と倫理に苛まれ、それでも全員の共通目的として明日があった。

もうそれすら揺らいできている。
源石のもたらした異常な進化は、まるで我々という種族の寿命すら近くにもってきてしまったのかもしれない。
「ドクター……　レッド、話がある。」
話、だと？
「そんな浮かない顔はやめろ。レッドも、もちろん私たちもそんなおまえは見たくもない。」
聞きなれた声だ。
シルバーアッシュ……
どうしてレッド以外のオペレーターもここに？
「ドクター。」
アーミヤまで？
なんで？
どうして？
「ドクターやケルシー先生が、レッドさんとのことで悩んでいるのはオペレーターの間では有名な話ですよ？」
不甲斐ない話だ。

レッド関係の話は、色々と検閲が入ってるんじゃなかったのか。
「……　は、はは、バレてたのか。私達は隠し通していたつもりなんだがな。アーミヤ、君も秘匿する側なんじゃないのか？」
「そんなことは関係ありません。
レッドさんやドクターの状態をみて、それで放っておくような職場なら、ロドスのオペレーターは今頃殆どが死体に変わっていますよ。」
強い目をしている。
「レッドさんともよく話しました。答えのでない問いというものもあります。だからこそ、逃げないで。いつもの戦闘指揮みたいに、自信を持って。
それでも出した答えをレッドさんに言ってあげてください。」
「おまえはこの程度のことすら処理できぬ人間ではあるまい。期待を裏切るなといっただろう？」
「いろんな話、いろんな人から聞いた。レッド、まだまだ、経験が足りない。だから、今度こそ教えて。ドクター？」
そろそろ私も、頑張らなければいけないのだろう。
「君の、好きにすればいい。他人のための復讐でもなく、ただひたすら、君が幸せになる方法を選ぶんだ。」

これは私も、今この瞬間までわからなかった。
アーミヤ、シルバーアッシュ、ここにはいないが、レッドに話を聞かせてくれたオペレーターはまだまだいるのだろう。
彼らこそが、それぞれ先生なのだ。
「そう……か。皆にも言われた。復讐するのはレユニオンと同じ、なにも生まない。なにも救えない。
幸い、レッドは、まだ、そう考えれた。皆が、いるから。」
それから私は、レッドが皆から聞かされた話を聞かせてもらったり、ケルシーに秘密保護の条文はどうなったんだと詰められた。
皆でうどんが食べたいなどと私に群がられたときの、レッドの顔といったら。
レッドも食べたかったんだな。
不器用な私のものでよければ、いくらでも作るさ。

オペレーターを向精神薬代わりに使うヤベー奴

第7話

「ＳｏＣなんで使ったらなくなるの???情報なんだからそのままもう一度使えば良くないか???」

「機密保護の観点から再生後は自動的に爆発するようになっている。残念だが使い回しは出来ないらしい。」

なんで？

どうして??

今更機密保護とは……？

私の部屋は最高機密満載なのに勝手に入ってきて勝手にソファーで寝てるシージが言うのか？

そもそも爆発ってなんだよ。何が悲しくて爆発させねばならんのだ。

「それなら私の機密保護も徹底してくれ……」

「公然の秘密というのもあるだろ?ドクターはそれだ。」

なんで???

私公然の秘密扱いなの???酷くないのか???
それをいいながらシージはゴロゴロ喉を鳴らしながらソファーで寝るのを止めない。
コイツ万獣の王とかいいながらただの猫じゃないのか?種族詐称か?
「ドクター、入るぞ。」
エアロックのドアが開く音。
空気の抜ける音だ。
ギョッとしてそちらをみやると、まあ見知った顔がそこに佇んでいた。
流れるような銀髪、きまってる黒いコート、間違いない、シルバーアッシュだ。
とても強く、頼りになる上に何故かコイツは距離が近い。
記憶喪失前の私に疑惑が増えていく一方だ。
そんなことより。
だからなんで皆そんな当たり前のようにキー持ってるの???
「シルバーアッシュ!?君もどうやって入ったんだ!?」
「鍵で開けた。当たり前だろう?」
そ　う　じ　ゃ　な　く　て
「どうして鍵持ってるんだ???」
必死な私。

しかしシルバーアッシュはそうではない。
フッ、そんな擬音が聞こえてきそうなほど不敵に笑う。
「私と盟友の仲であれば、これくらい当然だ。」
輝くほどの笑顔と美声でそう言い放ったのだ。
はいかっこいい～！好き～！
もういいや。私のプライバシーは多分クロージャあたりが９９％オフで売り捌いてると考えるのが妥当だ。
「おっ、珍しいな、こんなにドクターの部屋が騒がしいなんて。俺も混ぜてくれよ。」
ノイルホォォォォン!!!お前も？お前もなのか？
別にしたくて騒がしくしているわけではないのだが???
「是非くつろいでいってくれ。」
シルバーアッシュ???いい声で仕切るのやめて???
いつも隣で戦ってるからってそんなに仲良いのか君ら???というかここ私の部屋。私のテリトリーだぞ！
「ちょっくら何時もの仲間も呼んでくるわ。今空いてる奴は、確かあと6人！」
呼ばなくていいから。
ああどうしてここまで人が押し寄せるのだろうか。

私がそこまで信用ならないのだろうか……？

数刻前。ドクター直属部隊。
「ドクターの状態は？」
「この前のレッドの件で大分マシにはなったが、何時どこでまた精神を病むかわからん。」
「まあ記憶喪失でアーミヤ社長並みの激務、覚悟強要されるからなぁ。」
「アーミヤにも気を配っておいた方が良さそうだな……　盟友の悲しむ様は見たくはない。」
アーミヤ、レッドを除くエリート部隊員が円状になってドクターやその関連する人物の会議をしている。
「わしはケルシーも中々に危ういと思うんじゃが。」
白い特徴的なサヴラの弓兵、レンジャーが口を開く。
彼の助言は的確且つ分かりやすい。
人を見る目もある。
戦闘の実力は年により落ちたとは言え、同じく年により洗練されていく能力もあると

いうことだろう。
「「確かに……」」
「基本これからも何時如何なる時間帯でも一人はドクターの周りにいる、何か悩んでいるだとかあったら直ぐにそれの解消に向かう、それでいいな？」
「「了解」」
「ドクターから受けた恩はこの短い期間でも、私にとっては大きいからな。居なくなられると困る。」
「わしもじゃ。折角見つけた安寧の地を守らねばな。」
「わたしもドクターが居なくなるとＢＳＷに戻らなくちゃいけなくなるので……もう少しロドスに居たいです。」
それぞれがそれぞれ、様々な想いを持ってその後の部屋での騒ぎに繋がるのだった。
なお後半は皆当初の目的を忘れただひたすら仲間やドクターと共に遊ぶのが楽しかったようだ。
もちろんあとで皆アーミヤに怒られた。

第8話

レッドは有能だ。
それは間違いがない。
レッドは幼い。
しかしそれは、欠点ではなく、むしろ美点だ。
素直で、吸収も早く、純真である。
素晴らしい。
心、技、体全てが揃っている。
しかしだ。
私は今レッドに関してすさまじい難題の処理に追われている。
オバアサンだかなんだか知らないが別にそいつのことではない。
いや十二分に怪しいのだが、今のレッドならケルシーの方に靡くだろうという謎の信頼がある。
問題はレッド自身の中にある。
しかもその問題の大きさはロドス内のみで終息せんのだ。

デカイ。デカすぎる。

その問題とは。

「匂いだ。狼の匂い。レッド、ハンティング開始。」

「ヤメロォォォォ!!!」

テキサスがっ……　犠牲になったっ……！

尻尾だ。レッドの尻尾への探究心、それこそがこの問題の根底にある。

はじめはループスのみだったというのに、最近は尻尾さえあれば時間もところも構わず触りにいく。

ああそうだろうな、モフモフの尻尾はいい。

が、ダメっ……！急に触るのだけはダメっ……！

公共の場で触るのにも問題があるっ……！

セクハラは……　同性でももちろん成立してしまうっ……！

更にこれは私が医者、ひいては学者だからよくわかる、というか誰でもわかると思うんだが尻尾ってわりと急所である。

背骨の延長線上なので神経がつまりにつまった最高クラスのデリケートゾーンなのだ。

しかもこれは別に触られると力が抜けるとかそういう都合の良い物ではない。

痛いのだ。純粋に。
だって急にだぞ？感覚神経に過剰な刺激を与えればそりゃ痛いのだ。
テキサスはまだいい（よくない）。
シルバーアッシュにでもしてみろ。
軍閥と敵対するのは良くないぞ。
私の技術と対外交渉の能力ではカバーしきれん。
まあレッドの直接の責任はケルシーにもあるが、もちろん私も彼女を保護する人間だ。見過ごすことはできない。
というわけで。
「めっ！」
「ごめんなさい……」
「そこまで長考して考え出した注意がそれしかなかったのか???」
テキサスが尻尾をさすりながらこちらへ逃げてくる。
レッドはしょんぼり、うーん衝動的にやっちゃうんだろうなぁ……
注意に関しては、力及ばずすまないとしか言いようがない。
……　語彙力無いんだ……　記憶喪失の影響かな……
「とりあえず触ってもいい尻尾とダメな奴を区別しような。」

「いやほとんどダメだろ。」
「えっ……」
テキサスは厳しすぎる。レッドがそれだとかわいそうだ。
みろこの上級術師の群れのなかに群狼だけで突っ込まされたときの顔を。
「うーん……合法で尻尾のモフモフ……あっ！人形とかどうだろうか？どうせ毛など死んだ細胞なのだ、限りなく近いものもしくはそのものを人形に加工すれば誰の許可取るのでもなくモフモフ出来るじゃないか！」
パアァッと輝くレッドの顔。
テキサスの反応も悪くない。
「それは名案だな。」
そうだろ？
というわけで早速行動開始だ。
「よし、君にも協力してもらおう。」
「まあ、私とロドスの尻尾の安寧のためだ、臨時手当ては出してもらうぞ。」
「いや、普段通り皆で出撃すればいいよ。ただしレッドは出さない。」
「「どうして？」」
両方、きょとんとしている。

「レッドにサプライズしたいのさ。」
それに、材料なんてどこにでも転がっているだろう？
いちいち集めに、買いに行かなくても。

今日も今日とて機密文書を強奪しに来たレユニオンの死体を漁る。
もうなれたものだ。
初めは嫌悪感を感じ何度も吐いたが、いまはもうなにも感じない。
よくよく勉強すれば、死体も生きている組織も似たような物だとわかった。
私は感染者だろうが、非感染者だろうが差別はしない。

ただ私たちに反抗するものを人扱いしないだけだ。
私たちを人扱いしない奴等だ、こちらが気を使うのも不等価だというものだろう。
「う……　あ……」
おお、生き残りがいるではないか。
レッドという精鋭が使えなかった今回の作戦は非常に厳しい戦いだった。
全く、私情を挟むとは私も甘い指揮官だ。
だが生き残りがいるのは僥倖だった。
素材は新鮮でいたみのすくないものの方がいい。
重装備をひっぺがせば、中身は怯えた顔をこちらに向けていた。
調子のいいものだ。
先程まで盾で殴殺しようとしてきたというのにな。
入れ換える心は、わりと沢山ストックがあるらしい。
「た……　助けてく」
顔を掴む。
こちらへ引き寄せる。
これでも大事に扱っているのだ。
気を付けなければ、素材に傷が付くからな。

「表面上の鉱石病進行はゆるいな……　コイツは使える。
ノイルホーン、これを積み込んでくれ。」
「おう。
……　ドクター、それに何するんだ？」
「いや、すこしばかりね。ロドスの未来を守るためだよ。」
「まあいいけどよ……　声が怖いぜ。俺は前のドクターも嫌いじゃないが、あんたはあんたでよく頑張っていると思う。突っ走りすぎないでくれよ。」
ノイルホーンは優しいな。
でもときたまわからなくなるのだ。
私は倫理観も見様見真似。
なにもわからない。
なんとなく、血みどろなのは嫌な気がしたが、それも慣れてしまった。
おかしい、初めは嫌な筈だったんだけどな。
忌むべき理由を忘れ去ってしまったのか、私はどうしたかったんだろうか？
今はとにかくレッドのための人形を作るんだ。
レッドは超感覚持ちだから、素材に勘づかれないようにしなきゃいけない。
一度でも素材となった人を見ていれば、変わり果てた姿になろうとも判別してしま

う。出来てしまう。
だから連れてきてないんだ。一度も見せないために。
いや、まて、本当に？
私は倫理観がわからないのか？
それなら別にレッドを連れてきても良かったんじゃないかな。
あれ？
……　あれ？
わかるのに？
いや違う、他人と自分は違……　う？
あれ？あれ？
足取りがおぼつかない。
感覚がわからない。
私、私ってどこにあるんだ。
歪む。
脳が混乱している。
不味い、マズイマズイマズイ。
どこの立ち位置？

どれがどれだか、重なりすぎてなにもわからない。
そうだ、逃げなきゃ。
いや、違う、スカルシュレッダーが。
ちがうちがうちがう、サルカズの傭兵に対抗しなければ。
そうじゃない、そうじゃない、今の目的を思い出せ。
ケルシー？なんでお前が出てくるんだ。
起きなきゃ。
声が数百個も、万も、億も？わからないが聞こえるんだ。
記憶が重複してる？
どうしたって急に……
頭がいたい。痛い。いたい。いたいいた――――

第9話

Ｄｒ．■■■
性別■
戦闘経験無し
鉱石病■■■■■■■■
■■■■■■■■■■■■
健康状態は良好。
精神も不安定だったが改善方向にある。
知識の吸収にも意欲的、別段不安要素はない。
君自身も安心したまえ。
君の指揮と医療知識、そしてコミュニケーション能力にはとても助けられている。
これからも励んでくれよ。

上記はＤｒ．■■■閲覧用のダミープロファイルである。
また下記のトゥループロファイルはドクター以外のすべてのロドス人員に周知させるように。
ただし現時点で、外部より派遣されてきたオペレーターへの開示は私の許可なくしないように。
Ｄｒ．■■■
性別　特定不能
戦闘経験無し
記憶喪失直後のドクターは躁鬱の気はあったものの、重大な病ではなかった。
しかし現在、彼、あるいは彼女の精神は非常に不安定で崩壊寸前だ。
見様見真似で自己を構成し、幼く退行したはずの自己をひた隠しにし、築き上げ直している。
彼は近い関係のオペレーターの精神面を無意識下で吸収し、そしてそれらのためにあ

ろうと自己を矯正している。
当初は規模が小さい、微笑ましい行動指針のレベルで留まっていた。
が、精神面に小さな問題のあるオペレーターのその小さな歪みと、記憶喪失による常識、倫理観の欠如とあいまり異常行動に発展している。
性別特定不可能というのは、精神面において現在「あれ」はジェンダーの偏りを持たないからだ。
赤ん坊が性徴を示さぬように、あれもまたそうなのだ。
また理性回復剤との相互作用によって一足飛びの思考の暴走が見られる。
いわゆる統合失調症の諸症状を顕在化し、一人で行動を完結させる方針が見えかくれする。
精神面としての教養はゼロに等しいが、頭脳と知識のみは素晴らしい。
そしてそれが良くないのだ。
一括して言えることは、その素晴らしい頭脳は素晴らしい精神によってのみ制御される。
しかしあれは今は無垢だ。
何をするかはわからない。
倫理も、常識もない。

枷が無いのだ。
奴は感情を持たない、感情由来に見える行為は全て自己に近い何者かに主体をすり替えて行っている。
誰かのためなら、遠い誰かを平気で犠牲にし、最短経路で何かを成し遂げようとするし、更に踏み込めばその「主体」のことを真に考えている訳ではない。
迎合しているようで、誰一人として信頼せず、すべてを知り、全てを織り込んで無理矢理誰かのために動こうとする。
よりどころが欲しいオペレーターの燃料になりきり、家族が欲しいと言うオペレーターの家族になりきり、そして皆の思いである「良い代表」になりきる。
繰り返すが、徐々にこれらの「なりきり」のために手段を選ばなくなっている。
最新のインシデントでは手作りの人形をオペレーターへプレゼントするために生きている組織からの採取を試みた。
常軌を逸している上に、そもそもの指針がはっきりしていない。
加えて、精神面は細かく分離している。
単一化して対策を練ることは最早不可能だ。
多種多様な、表層化したそれぞれの精神に対応した行動を取らなければならない。
最も警戒しなければならない事態は、ドクターがロドスという組織に敵対的な者と親

密になったときだ。

あれはきっと、その親密だと思い込んだ存在のために自己を作り替えるだろう。

今ここであの頭脳を無くすわけにはいかない。

直近の目標は、ドクターに自己を与えろ。

以上。

――――――――ケルシー

都合のいい
第10話

私は衝撃を受けた。
ドクターが、まさかそこまで追い詰められ、壊れているとは思いもよらなかった。
そして、失望よりも先に憐れみと、申し訳なさと、心のどこかで実は嘘ではないのか、という淡い期待を抱いていた。
……　あの人が、あの人の姿が、まさか私にとって都合のいい存在であろうとしていた等と、本当だとしてもおぞましすぎる。
夢だとか、そういうものならばどれだけよかったのだろうか。
ああでも、もう私も正気ではないのかもしれない。
だって別にドクターがそうあった存在であろうと、もうどうだってよくて、気にもならないように思えてしまう。
そうだ、それで済んでいるのならばそのままでも良いのではないか？

ドクターが倒れて、次の日。
朝起きて、食堂で、ここまでは全くもって同じ。
ドクターの介在しない、私の短い時間。
ああ、願わくば嘘であってくれ。
会いたくないとは思わない。
むしろもっと早く会いたい。
会わなくては、やっていけない。
私の中で、ドクターはそれほどに大きな存在となっていた。
背中を押してくれて、信頼してくれて、そして頼れる存在。
それが「ドクター」だ。
ぞろぞろ、ざわざわ。
徐々に食堂へ人が集まる。
誰も彼も、顔は暗い。
美味しい朝食を前にしているというのに、それは何故か。
とぼけるのもやめだ、もちろんドクターに関してのことであるに決まってる。
かくいう私も、きっと酷く歪んだ顔をしていることだろう。
ポツリ、ポツリ、と配給を取りにいく人影。

いつもは我先にと殺到するのに、今日はその面影すらない。
規律正しいならびが産まれる。
昨日のケルシーが配布したデータが本物とするのなら、やはり「ドクター」は私たちの心の中に、自我が無いからこそ水のように入り込み、中毒を起こさせるのだろう。
知っていても、目を背けたくなる。
「隣、いいか？」
現実からの声だ。
よく聞きなれた声だが、それはドクターの声ではない。
「ああ。」
返事する前に、既に彼は座っていた。
シルバーアッシュだ。
いつも肩を並べて戦っているのだから、私たちは仲がいい方だと思う。
シルバーアッシュがどう考えているのかはわからないが。
彼は底知れない、人間性の中に、冷えきった知性が垣間見える。
「空気が暗いな。」
そういいつつ彼はいつも通りの食事を滞りなく続けている。
呑気なものだ、結局彼もドクターがどういう状態なのか知らないとその程度だという

ことだろう。
彼はカランド貿易という企業からの一時的な協力者、乱暴に言えば外部の人間なのだ。
だから昨日のデータのことを、彼は知らない。
――――――少しだけ、優越感を感じた。
「そのわりには余裕綽々に見えるが。」
だから少し、踏み込んでみる。
情報的有利はこちらにあるのだ。
無駄とわかっていても、彼の内心を引きずり出して、見てみたいと柄になく思った。
だけどもシルバーアッシュは、やはりその余裕を崩すことがないのか、ニコリと笑うと
「私は盟友のことを信頼しているからな。倒れた、だからどうした?彼奴はその程度で終わる人間ではない。」
と、いいのけた。
知らぬというのに。
私よりも、知らぬというのに。
カチャカチャと、とてもとても小さな音しか出さず、育ちのよさを感じさせる所作で

朝食を食べている
「随分と知ったような口をきくんだな。」
だから少しくらい、強い語調になる私を許して欲しい。
「いいや、現状は知らない。「過去」を知っているだけだ。」
するとズイ、と彼は顔を近づけ耳打ちをしてきたではないか。
「――――今、何かあるんだろう?」
底冷えを感じた。
ホークアイ、そう言われる彼の戦術眼は、確かにここでも発揮されるのだろう。
もうシルバーアッシュはたどり着きかけている。
朝のこの短い時間で、ドクターが倒れた事件という大きな「カモフラージュ」となるものもあるというのにも関わらず、彼はその裏に潜む真のロドスの課題、弱味といってもいいそれを。
食器の音は止んでいた。
長い時間がたった気もした。その目は私の心の底まで見通しているのかと思える。
これからの会話でボロを出さないという保証もない。
この手の謀略とはもう離れたと思ったのだがな……
「ドクターが倒れたという大きな出来事があるな。」

こういうのは苦手だった。元々。
煙に巻こうとしても、相手が悪い。
大袈裟にシラをきるしか方法を知らない私にとっては、シルバーアッシュは難敵過ぎる。
我ながら拙いものだ。
「私が聞いているのはそのような「表面上」のことではない。それの「原因」、火種を見付けたいのだ。
大方口止めでもされたのだろう。
だが考えてもみろ。
口止めをしたそいつは本当にドクターのことを考えていたのか？
ロドスのために、助けになるかもしれぬ人間に対して口をつむぐ、その行為はドクターのためになるのか？」
息をつかせぬ尋問。
尋ねている？いいやちがう。
確実に「言わせる」という意思を感じる。
それは――
「ヒュー。朝からおあついことで。」

それは。
その言葉を吐きそうになったところで、思いもよらぬ助け船がやって来た。
「ノイルホーンか。そう見えるのか？心外だな。彼女とはそういう関係ではないのだ。少し内密な話を、な。」
「それがもう十分怪しいんだよなぁ。そういう関係なのは別に責めねえが、場所を選んだ方がいいぜ？」
中々、賢い。
ノイルホーンは地味な奴だという認識を改めなければならないな。
「そうだな。だが「そういう」関係性は否定させてもらおう。」
シルバーアッシュが引いた。
おくびにも出さないが、きっと残念がっていることだろう。
また食事の音が小さく小さくなっている。
「へいへい。」
「私からも言わせてもらおうか。」
「えー、否定的だなぁ。シルバーアッシュって顔いいじゃん？」
軽口は止まらないな。
案外、ノイルホーンは頭が固いわけでもなく、面白いやつなのかもしれないな。

ドクターは、未だ来ない。

第11話

頑なだな。
結局のところ、ロドスというものは良くも悪くも全体主義だ。
誰一人として、なすべき目標に本物の「賛同」を持っているのだろうか？
中途半端と理想はとても近い位置にある。
ロドスは、一体どちらであろうか？
我が盟友は、どこか変わってしまった。
それが本当は変えられたのか、それとも自ら変わったのか、ただの事故なのか。
とにかく穏便には済まないだろう。
倒れた。
ただそれだけの事実だが、しかし事実はそれ以上の何かを含む時がある。
今回はそうであろうと、私は感じたのだ。
ノイルホーンが現れてから、しばらくたった。
私はすでに食事のすべての行程を終わらせ、今日割り当てられた作業をこなさなければならない。

シージは優秀で、頭の回転も早く、そして情けも持ち合わせているが、脆い。
そこにつけこんでやろうかと画策すれば、ノイルホーンの助け船により未遂に終わってしまった。
なかなか無口な奴だと思っていたが、実際のところ饒舌で、機転が効くではないか。
食堂から退出し、靴の音を響かせ、いつもの通りの道を行く。
イェラグとは比較にならないほどの最新の機材、設備は、私の目ですら驚いたが、今になっては慣れたものだ。
見慣れた貿易窓口につけば、マッターホルンが先に待機していた。
「お前はどうだ。何か情報は得れたか?」
私はロドス専属のオペレーターが何か重大な情報を我々外部の人間に隠していると推察している。
私と接点を持つ人間にも、徹底した情報統制が入っていることだろう。
マッターホルンは、私の問いに申し訳なさそうに首を振ると、「何も、得ることが出来ずじまいでした。」とだけ返した。
クーリエにも聞いておこうと考えたが、おそらく彼もいい線までいけども真実は知り得ないだろう。
はて、私にはここにいる人間で他に信頼できる者がいたか。

エンシアは駄目だ。
きっと知り得てないだろうし、そもそも私は彼女をあまり怪しげな話題に巻き込みたくはない。
……　いかんな、郷には入れば郷に従え、そう普段からのたまっているというのに現実はかなり厳しいものだ。
なんらかの弱味、ともすれば脆弱性であることは承知しているのだが、盟友の危機だからこそ私は気がかりなのだ。
それがどれほどロドスに対して大きな問題だとしても、個人同士の関係性にそこまで制限をかけるのは間違っているだろうし、私は許さない。
私は必ずや盟友を助けなければならない。
このような、何とも知れぬ不確定な事件で盟友を困らせるわけにはいかない。
仕事を片付けている間も、私の頭脳は常にそのことを考えていた。
考えざるをえなかったのだ。
どれくらいの間、外部との交渉、駆け引き、契約取得に勤しんだ頃だろうか。
長い、長い作業の割り振り、規定分丁度を終わらせた時だ。
足音が聞こえる。
規則正しく、すこしばかり神経質な印象を受けるそれは、程度の大小あれど自由な人

間の多いロドスでは少ない傾向にある。
このような歩き方をする者は、私の知る限りでは――
「シルバーアッシュ、入るぞ。」
そうだ。
何時でも一番に戦場に飛び出る、血気盛んな奴だというのに、表面上は冷ややかな人間。
ここへ突然現れたのは、ペンギン急便に所属するテキサスだった。
テキサスは頭の天から足の先まで、真面目且つ仕事人間の皮を被っているが、その実自らの欲求に忠実で、内なる信念のためならどんなことでもしでかしてしまう熱情が見えかくれしている。
そんな者が、しかもロドスの外部から来たペンギン急便という組織の人間が、同じく今現在締め出されているようなものの私の所へ来たのだ。
しかも、私とマッターホルンというシフトを把握しているのだろう。
つまりは、悪だくみの時間ということだ。
「ここに来た理由はなんとなくわかったぞ、テキサス。
我が盟友、君にも分かりやすく言えばドクターのことについてだな?」
「話が早くて助かるな。そうだ、そういうことだ。お前もどうせ仲間外れなんだろう?」

随分な言い様だが、今回に限ってはそれが事実だ。
マッターホルンが微妙な表情を浮かべている。
昨日から続くロドス民たちの、内での不審な動き。
私たちと盟友との接点を絶つ。
ああそうだとも、全くもって先は見えない。
テキサスの言う通り、我々のみが蚊帳の外だ。
だが、暴いてやろうではないか。
「ああ。君と私は、仲間外れ仲間と言ったところだな。」
何、ロドスはありとあらゆる組織の垣根を越えて人員を集めているグローバルな企業だ。
そこだ、そこがつけこめる点だ。
ケルシーか、あるいは他の人間の差し金かもれんが、行き過ぎた焦燥はむしろ事を悪くすると言うことを教えてやろう。
そう、仲間外れ仲間は沢山いる。
レユニオンやロドスのように、避けられたものはいつか避けられたもの同士で徒党を組む。
それを利用してやるのだ。

現に、既にテキサスはこちらを頼って来ているではないか。
「言えてるな。話が早いのに甘えて、一つ頼みがある。
ペンギン急便と、カランド貿易。その二つの勢力で協力し、ドクターの身に起きた事を知りたい。」
「良いだろう。」
即決だ。
向こうから良い話が転がり込んでくる。
迷う理由は何一つない。
全てのロドス民に、我が手腕を示してやろう。
盟友。必ずや、私はお前の助けになる。

第12話

いつも見ている、見慣れすぎた光景。
喜びが産まれ、悲しみが溢れ、終わりが訪れ、再開する、そんな場所。
ロドスは医療機関だから、当然ですけど。
でも、でもそこに今居るのは、もう二度とここでは見たくないと思っていた人物で、そして。
「アーミヤ。」
そして、この人物は、私の知ってるその人物とは変わり果てている、そう伝えられた。
私は定期的にドクターだったものの精神ケアと、また機材の操作のためにこの部屋を訪れなければいけません。
ドクターの容態は最重要機密、接点はなるべく減らしつつ、なおかつ信頼性を獲得し、更に自らはその恐ろしい精神構造に呑み込まれないようにしなければいけないのです。
「アーミヤ?」
そう、こうやって呼び掛けられていると言うのに、その言葉は全てが特異な人格から生じるまやかしで、紛い物だというのです。

ケルシー先生の言うことですから、きっと、万に一つも間違いではないんでしょう。
だけど、それでも私には、そうは思えないんです。
だって、この人はあのドクターですよ？
私に全てを与え、私のことなら何でも知ってたドクターなんですよ？
私の耳のように長い長い時間、こんなことばかり考えては浮かび上がったその諦念を振り払う。
呑まれてはいけない。
ここで止まってはいけない。
ドクターをあるべき姿に戻すと、もう一度頭に叩き込む。
恐ろしくもあるのだけれど、私はいつか諦念に呑み込まれてしまうのではないかという思考が何度も脳をよぎるたびに、そちらの方がどれだけ楽だろうなと、そう何度も感じてしまう。
白い病床の上に、いつもの黒い服装のドクターが佇んでいて、私の方に話しかけてくる。
いいや、ドクターじゃない。
この人はドクターじゃない。
「アーミヤ、君はいつも考えすぎだ。」

本当のドクターじゃないんだ。
その暖かな言葉を紡ぐ口腔は、いまはきっと虚無で埋まっているに違いないんです。
だから私は口を紡ぐ。
「きっと君は私の、記憶喪失という事実に負い目を感じているんだろう？」
この人は、私の心の中を見透かすように口を開いている。
でも、絶対に本当のドクターじゃないんだ。
ケルシー先生がそうおっしゃっていたではないですか。
気をしっかり持たないと、私。
あまり入れ込んではいけない。
「何も、気に病むことはない。
事実というものは一人で受け止めるにはあまりにも大きい。」
この人はドクターじゃない。
この人はドクターじゃないんです。
きっと、きっとこの人は鏡のようなもの。
惑わされてはいけません。
ケルシー先生がそうおっしゃっていたではないですか。
そうだ、何度も何度も思い出さなくちゃ。

こんなにも優しくて、心に入り込んでくる言葉を紡いでも、私の心の綻びを突くような声を発していても、違う。
私にはそう思えなくても、違うはず。
違うはずなのに、私は早くもそう思えなくなっている。
不味い。早く仕事を終わらせないと。
でも、私はもっとこの人、いやドクターと話していたい。
そんな欲求が、たちどころに大きくなってくる。
だけど相変わらず私の口は全くもって開いてなかった。
すこしでも口を開けて、そして会話してしまえば、もう後戻りができない気がしたから。
「背負うことは悪くないんだ。
だって、それが君の決意なら、無下にはできないよ。
でも、私にも背負わせてくれ。
君だけしかいない、そんなロドスじゃない。」
「ド……　クター……」
だめだ。
声色、動き、雰囲気、そのどれもが他人の心を主体にしてるからこそ、その向き合う

人の望む通りに、隙間に流れ込んでくる。
何も感じないからこそ、真の意味で他人の為に動ける。
そう思い知らされる。
本当に、中毒性が高いのかもしれない。
その目が何者も写していないのはわかっていたけれど、もうそれでもいいのかもしれない。
「私が倒れてからも色々あったんだろ？」
私にも、色々教えてほしいな、アーミヤ。」
ああ、私は弱いな。
この短時間で、わだかまりがなくなった。
失くしてしまった。
もうなにも、わからない。
「は……　い。」
私は、私からの視点しか持ち得なかった。
将来ロドスや、私や、感染者の為になるのなら、ドクターがドクターじゃなくてもいいのかもしれない。
薄情ものですよね。

第13話

呼んでる。
誰か、はわからないけれど、レッドを、呼んでる。
ロドスは、平和だった。
ちょっと前までは、ドクターが消えて、少しだけ騒がしくなったけど、今はまた、戻ってきたから。平和な筈だった。
嫌な匂いだ。荒んだ匂い。
ドクターが帰ってきてくれたからもたらされた平和は、でも、やっぱり、ドクターだけに頼ってる。
ドクターが倒れてから、皆おかしくなった。
ドクターも、すこし、様子がおかしい。
なんだか別の匂いが、する。
混ざりきった、雑多な、何か。
助けなきゃ。
レッドも、助けられたから。

きっと、この声は、泣いてる。
レッドは、そんなに頭は良くない。
でも、だから、できることがある気が、する。

匂いが、強い。
人の数、多分たくさん。
でも、派閥は少ない。
ざっと、二つ。
外の人間と、内の人間。
それだけ。
けれど、皆ロドスなのに。
皆、同じ人間なのに。
少し前、配られた資料は、外の人間に見せるなって、ケルシーがいってた。
でも、おかしい。
レッドには難しいこと、わからない。

だけど、ドクターが大変なのは、わかった。
だったら、外の人にも、知らせてあげるべき。
人垣を、お構いなしに、進む。
変な目で見られても、無視する。
もう、慣れた。
ちょっぴり悲しい、けど。
そんなことより、大事なものは沢山ある。
すり抜けていく。
こんなところで、レッドの技が役に立つのは、とても意外。
外に締め出されている、この人垣は皆外の人間。
そういえばここは、ドクターが居るらしい病室の近く。
人垣を抜けきると、そこにはシルバーアッシュと……　テキサス、そしてアーミヤ、あとロドス内部のオペレーターが居た。
すごい剣幕。
柄にもない、というのか？
とにかくレッドは、レッドにしては珍しく、怖いと思った。
戦場で何度も死にかけたけど、そのどれよりも、怖かった。

「これだけの数の人間がロドスのやり方に不信感を持ってるのだぞ。
アーミヤ、いい加減に選択をするべきだ。
我々にハッキリと、君たちは信用ならないといい放つか、あるいはドクターの情報を我々にも開示するか、だ。」
ギロッ。
そんな音が聞こえそうな程、シルバーアッシュの目は鋭い。
ケルシーが本気で怒ったときと、いい勝負かも、しれない。
「現在開示できる情報は全て開示しました。ドクターの件に関しての要求はこれ以上呑めません。」
でも、アーミヤは引かない。
あの目は、何度も見たことがある。
暗い、けど真っ直ぐ。
決意の、目。
あのアーミヤは、絶対引かない。
シルバーアッシュもそれはわかってるのか、はじめからアーミヤを折るつもりはなさそう。
「そうか。だが我々は「ドクター」の指揮で動くという契約の下このロドスへ来ているの

だ。まさかあの、部屋から一歩も出れぬような容態で指揮を執れるわけではあるまい。
ということはつまり、我々は今動けんということだ。
これが何を意味するかわかるな？
個人の感情ではない。安全面でもそうだ。
ドクターの下なら安全に戦える。そう信じてここへ来たのだ。それが、言えぬ理由で別の人間に指揮を任せる、だと？
それは旧態依然とした軍部でならば通用したかもしれんが、ここ先進的なロドスではいささか都合が悪いのではないか？」
レッドの苦手な、理論だ。
理屈を立てて、意見を通す。
感情や、常識に左右されない。
レッドには難しいことはわからないから、あまり好きじゃない。
流石のアーミヤも、一瞬怯んだように見えた。
けれど直ぐ考えを纏めたようで、毅然と答えた。
「わかりました。皆様にも情報の開示を行うことを約束しましょう。
ですが、今ではありません。ケルシー先生とも協議しなければならないので。」
シルバーアッシュは未だに厳しい目付きだったけど、その言葉を聞いてから一人、ま

た一人と人垣の人間が離れていく。
信じたんだろう。アーミヤを。
最後にシルバーアッシュ本人が居なくなって、アーミヤはほっ、とため息をついていた。
「あっ、レッドさん……」
こっちを、みた。
疲れきっていた顔をしてたのに、直ぐにまた笑顔を作る。
漏れた笑みじゃなくて、作ったんだ。
「恥ずかしいところをお見せしてしまいましたね……」
無理、してるのは分かってる。
アーミヤ、責任感が強い。
このままじゃ、いつかきっと壊れてしまう。
「全然、アーミヤ、頑張ったと思う。」
口下手なレッドだけど、すこしだけでも、力になりたい。
「そう……ですか……？」
きっと、そう。
次はレッドも頑張らなくては。

ドクターが、呼んでる。
いつのドクターなのか、それはわからないけれど。

第14話

「ドクター。」
薬ください。
独特なこの匂いは、ロドスが製薬会社である以上ここで暮らす上で慣れなければならない、身近な臭気だった。
ドクター、と病床に上半身だけ起こした人間に呼びかけるその赤い服をきたループスの人間は、そんな慣れきった筈の匂いすらも鋭敏に拾う。
その匂いに混じる、おぞましい何かの匂い。
物質的な匂いと、そして概念的な匂い、どちらなのかはわからない。
けれども、好ましくないのは確かだ。
「どうしたんだい、レッド。」
それは誰が聞いたって、あのドクターの声色だったのであろう。
誰が解釈したって、ドクターがそのループスの少女、レッドに話しかけている、という状況なのだろう。
そう、物質的にはまさしくそうだった。

ドクターと名付けられた物質が、同じくレッドと名付けられた物質に声をかけたのだ。それは正しい。
「何かあったのかい?それともこの私の姿に心配してくれているのか?レッドは優しいね。」
そう、そう、物理的には必ずドクターだ。
皆の耳には心地よい音色だろう。
ドクターはそういう話し方を意識している人間だった。
レッドの耳にはしかしそうは聞こえない。
完璧を繕う薄っぺらい狂気染みた声だ、音色だ。音が外れている。
遠吠えの方が心地いい。
寸分の狂いもなくドクターだ。
しかしそれはドクターの中に間借りした、ドクターの皮を被った何かだ。それともドクターが変わり果ててしまったのか。
にこやかに、穏やかで、気弱で、優しい声色だ。
誰にだって好かれて、誰のことも見捨てない。
そんな仮面だ。
ループスの少女が口を開く。

「お前じゃない。」
そんなものはありえない。あのドクターに限っては絶対にありえない。
「お前に話しかけてない。」
叩き付けるように言い切ったその口、そしてそれに連動して鋭く研ぎ澄まされた瞳。
「レッド……？」
全てを見透かしているような、そんな印象すら与えられる。
何を見ているのだろうか、けれど物質的な観測は、何も教えてくれない。
「お前はレッドの知ってるドクターじゃない。みんなの知ってるドクターじゃない。お前は……　誰だ？」
核心に、ナイフが突き立てられた。これはもちろん、精神的な意味で。

しばしの、沈黙。
レッドがここにきたのは、表面上のお見舞いでもない。
熱烈に励ますわけでもないし、彼女はそういった情緒を持ち合わせていない。
「……　わからない。わからないよ。君はわかるのかい？頭の中に何か別人がいて、かつての行動をずっと繰り返させようとしてくる気持ちがわかるかい？」

ポツリ、ポツリ、とこぼれる音。
端から見ればただの精神異常者でしかないが、レッドには良くわかった。
その言葉の示す状態に、馴染みがあるからだ。
「君とかつて楽しく話せてたね。でもいつからか、君を戦力としてしか見れなくなった。どうにも楽しかった時期を思い出すんだけれど、まるで夢のようにしか逡巡できないんだ。
うどん、美味しかったよね？
そうだね、はじめは私も美味しかった。でもいつの間にかね、君たちのご機嫌取りのためだけに私はそれらを振る舞うようになって、そして君たちと会話するようになった。
私は、確かに楽しかったことを覚えてるんだ。」
そう語る、悲しげな語り手の顔は虚無だ。
なにも写していない。
都合のいいように解釈できるだろう。
笑顔か、悲哀か、あるいは憤怒か。
これは誰にでも好かれようと、効率のみを求めた結果であるのかもしれない。
だけれども本人はどうも思ってないのだろう。思えないのだろう。

だって非効率的だから。
「何が、言いたい。」
「もう終わったことだしさ。」
なにも写さなかった貌を、精一杯歪めて。
おそらく笑顔なのだろう。
恐ろしく機械的で、しかも露悪的。
けれど。
「また、仲良くしてくれよ。」
不純物が混じった。
どちらかはわからないが、しかし両方あるのならば希望はある。
「やっと声を聞けた、レッドも、やるべきことを見つけられる。」
確かに、まだ何かが残ってた気がした。

―――――――――――――粉砕音。
気づけばドクターは、宙を舞っていた。
レッドに手を引かれて、落ちていた。

病室の窓から叩き出されたのだ。

「……　何をしているんだ――――――」

今度は叩きつけられた。ロドスの病棟、そのすぐ外の庭へ物理的、物質的にだ。

「ドクター。それ。」

痛みを感じる顔を無理矢理に上げるドクター。

目の前にはナイフが突き刺さっているのを見た。

「ドクター。それとも、誰かはわからないけど――――――」

「――――――この目に、お前の死を写す。」

そしてそのナイフよりも鋭い、狼の目を見た。

ドクターはナイフを手に取り、その場を離れながら起き上がる。

するとどうだろうか、さっきまでドクターの居た筈の位置をナイフが掠めていく。

「プロジェクト……　レッド……　！お前は何をしているのか、自分でわかってるのか……　!?」

「わかってないのは、お前。」
怒気をはらんだ声は、自分が殺されかけたことにではなく、むしろ別のことに怒りを向けているように見える。
彼は必要とあらば自分の命すら数勘定するだろうし、愛する人だってそうするだろう。
それほどまでに計画し、それを完璧に実行することに愉悦を感じる人間だった。
だったというのは、かつての彼はもう死んだ筈だったからだ。
今の彼が持っているのは、かつての記憶に振り回されて立てた、自分の為に命を投げ捨てるほどの兵を育てる計画、それを邪魔されたことへの怒りか、それとも――
「きっと、レッドの知ってるドクター、こんなとき自分を責める。」
「何を……　わかったような口を……　！」
怒りのままに振り回すそのナイフは、あまりにも鈍い。
レッドはそれを軽々と避けると、掌底を叩き込んでドクターを弾き飛ばした。
「ドクター、教えて。」
起き上がろうとするドクターに、駆け寄る人影。
非番のオペレーターが異常に気付き駆け付けたのだろう。
「レッドさん！何をしているんですか!?」

その中にはアーミヤもいる。
「普通の人は迷ったときどうするかって、前ノイルホーンに聞いた。
例えば、今日食べる晩御飯で悩んだら。
そしたら、明日死ぬと仮定して何が食べたいか。それを思い浮かべろって、彼は言った。」
「じゃあ、ドクター。」
ドクターを守るように、オペレーター達が集まってくる。
「自分で自分がわからなくなったら、こうやって追い込まれると、多分わかると思う。」
「どうする、ドクター?」

この状況で、ドクターは混乱していた。
あってはならない混乱だ。
彼は真に混乱したことは今のいままでない。
何故ならば、本当に命の危機に晒されることが無かったから……　ではない。
その記憶に負けていたからだ。
パニックに陥りかければ途端に冷静になり、むしろ混乱とはほど遠くなる。

そして、刃のように鋭く指揮を執り、脅威を刈り取る。
それをする度に、昔に戻っていった気がしていた。
だけれども今回は違うのだ。
「わからない……　君が何をしたいのか、わからない……」
自分に向けられた意識は殺意ではないことをドクターは気づいていた。
だから混乱するのだ。
本気で心配され、そしてそれをぶつけられるなど、記憶の中には無いのだ。
「レッドが何をしたいか、それは別に重要じゃない。
重要なのは――――」
フツ、とオペレーターの視界から消えるレッド。
ドクターにだけ、見えていた。
目の前に現れたのだから。
「ドクターは、どうしたい？」
ナイフを振り上げた、レッドが居た。

「……　無理だ、無理だ、こんなの無理に決まってる……」

ガクり、と膝を折るドクター。

大上段に、片手でナイフを構えた隙だらけのレッドを前に、項垂れていた。

「許してくれ、許してくれ、昔の自分よ、昔の信頼よ、許してくれ……　私は冷徹になりきれない、期待されるべき存在になりきれない……」

「ドクター!?」

アーミヤがいの一番に駆け寄る。

ドクターはまだぶつぶついっていた。

「無理だった。それでいい、ドクター。わからないまま続けるより、無理なことがわかった。」

それを見届けたレッドは、踵を返していつの間にか何処かへ消えていた。

第15話

「あれからドクターの異常な精神挙動は減少傾向にある。」

そんな話をレッドが小耳に挟んだのは、あの不祥事からしばらく経ってのことだ。

他人には何故レッドがあのような凶行に臨んだのかもわからないし、レッドも、そしてドクターもそれに対して口をつぐんでいた。

ケルシーからはもちろんキツく叱られた。

それでも「それだけですんだ」というレベルなのだ。

ドクターは何も語らなかったが、レッドは悪くないとうわ言のように繰り返していたらしい。

前々から奇異の眼差しで刺し貫かれていた節もあったレッドにしてみれば他人が自らをどう思おうが大したことでもなかったが、けれども仲良くなった筈のオペレーターとすこしばかり接点が少なくなってしまったのはこたえたようだ。

ドクターは前と同じく他人と会話することが許されたが、少し前までの饒舌で尚且つ他人の心を見透かし、自分の姿をどうとでもねじ曲げる姿勢は何処かに消えてしまった。

全員がまるで別人のようだと感じただろうが、しかし復帰直後、チェルノボーグから逃げてきた時はそんな感じだったというのを思い出すには時間はかからなかった。
あの事件の次の日にアーミヤからドクターの陥っていた状態の詳細が周知されたので、皆それもあってかドクターの変化には直ぐに適応したのだ。
すこしばかり不器用で、完璧じゃなくて、頭は切れるけど情を捨てきれない。
そんな人間に戻った。
人は付加価値に目をやることが多い。
ドクター自身、自らの価値をその付加価値に見出だし、それに取り憑かれたのだろう。
生きている限りそれはこの世界だれにだって起きる事象で、そこから気付かぬ内に皆狂う。
レッドはそれを眺めて、束の間の安心を得ていた。

ロドスの宿舎は暖かい。
直近のそういった出来事を思い出しながら、レッドは一人窓の外を眺めていた。
他人のことに必死になったことなど、レッドはつい最近初めて経験したことなのだ。
今までは特になにも考えてなかった。
というよりも余地が無かったと言うべきだろう。

そしてこのロドスで、ケルシーによってそのためのリソースを得た。
最後のきっかけをドクターが与えたのだ。
よくわからないが口寂しかったのでレッドは適当に選んだ飲み物を含みながら、逡巡を続ける。
なんとなく選んだものだったが、あたたかいものだったことは覚えていた。
オオカミというのは信頼するものと口を舐めあう習性があるらしい。
寂しさを感じたときにこのように口に、舌と同じくらい暖かい物を入れたくなるのは彼女がオオカミのような姿をしたループスだからか、あるいは人の形質が気分の落ち込んだときに暖かい飲み物を求めているのか、それとも文化的な物なのかはわからなかったが。
「レッド。」
彼女を呼ぶ声がした。
ふと考える。
これはオバアサンの声か？
いいや違う、あの声とは明らかに違う。
じゃあこの宿舎に今いる人物の声か？
当てはまらない。

ここにいるのは今現在イグゼキュター、アーミヤ、ドーベルマン、自分、そしてＩａｎｃｅｔ。

この声にはそういえば聞き覚えがあった、ということにレッドが気づくのは数秒かかった。

「……　ドクター？」

何せしばらくのあいだ全くもって口をきいてなかった、いや会ってすらいなかったドクターが突然現れたのだから。

「隣に座らせてもらってもいいか。」

急な宣言。

……　しかし、そういったわりには一向に座ろうともしない。

「どうした、ドクター。座らない？」

「いや、良いのかなって返事を待ってた。」

声が震えている。

結局本来彼は小心者なのだ。

嫌われたくない、失敗したくない。

だからああなるのだ、自分が壊れても壊れた側からそれで理想の自分に作り直す。それができるしできてしまう。

「それ、なんか変。隣が空いてるから座ればいいのに。」
「スペース的には空いてても精神的には空いてないときもあるんだよ。」
「なんとなく言いたいことはわかった。なら、そっちも空いてる。」
レッドは下らない同情に似たものかもしれないが、彼を救いたいと思っていた。
自分も彼に救われた、そう感じていたのだろう。
「それは良かった。」
遠慮がちにレッドの隣へと腰を下ろすドクター。
「ドクター。悩む必要は、無い。」
「そうか。」
「ドクターが教えてくれた。
ドクターも、他人の中に答えを見つけるんじゃ無くて、自分の中に答えを見つけるべき。」
ぎこちない励ましで、ドクターのそれとは大きく異なるけれど、それでもレッドは心からそう言った。
「ありがとう。」
それに対する答えも、またぎこちなくて、そして静かで短かった。
しかし、言葉に浮き出る感情は本物だった。少し、鼻声だ。

あれだけ虚無だった、機械らしい面影は今はない。
きっといつかまた、レッドか、ドクター、あるいは誰かがすりきれて壊れるかもしれないけど、きっと皆で、何度でも修理しあえる。
そう考えると、ドクターは少し、気が楽になった。
レッドもしばらくすればまた皆に溶け込むだろうし、ドクターも自分の弱味をもらす勇気を得ることができた。
ロドスは、暖かい。